

# 第

1回リスボン建築トリエンナーレ2007の Kantorリー・エキシビジョンにおける日本セクションのキュレータとして、今年の5月末から6月初めまで、ポルトガルに滞在した。実は資金難から、途中、参加を断念しかけたプロジェクトである。それでもアーティストの彦坂尚嘉、建築家の南泰裕、新堀学らとともに、たとえ自腹になっても、リスボンに行こうという強い思いを抱いたのは、都市だけではなく、会場が魅力的だったからだ。憧れの空間において展示ができること。建築家にとって、それは大きな動機になった。

メイン会場のポルトガル・パヴィリオンは、1998年のリスボン万博のために、巨匠のアルヴァロ・シザが設計した傑作である。ひるがえって日本では、2005年の愛知万博において世界に誇ることができる展示施設をひとつも生みださなかった。いや、首都の東京において、これだけの磁力をもつ会場があるかどうかさえ、心もとない。経済的には日本の方がポルトガルよりも豊かだろう。だが、豊かな文化資産

としての現代建築を国際展の舞台でできることでは、大きな差をつけられているように思う。ちなみに、ポルトガルでは、今回の展覧会にあわせて、現代建築の記念切手シリーズも発行された。

ポルトガル・パヴィリオンの最大の特徴は、エントランスの前に懸かる巨大な屋根である。しかも、まるで布のように、だらんと垂れ下がるコンクリートの薄い板なのだ。アクロパティックな構造が半屋外の大空間をつくる。誰もいないと、がらんとした空虚にすぎない。しかし、実際、数日ここに通り、有効に活用できる場であることを実感した。日本チームは、大屋根の下で、ボランティアで設営に来ている学生たちと読書をやったり、近くのスーパーで飲食物を調達し、オープンニング前夜に打ち上げを行なった。その際、パラサイト・シネマという映像のインスタレーションも、天井面に投影して、寝転んで鑑賞した。

ここは祝祭を許容する都市の広場なのだ。トリエンナーレの事務局も、われわれの偶発的なイベントを快く見守っていた。壮観だったのは、やはりオ

写真提供：筆者



## リスボンの資産、現代の広場

@Lisboa

ープニングである。大屋根の下に1000人近い観衆が集まり、主催者の宣言とともにトリエンナーレが始まった。人で埋めつくされたとき、この空間の意味が本当に理解できた。デザインのカッコよさだけではない。現代建築の空間も、まさに広場として機能している。リスボンでは、都市を楽しむ力に触発された。●

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう

建築史家、東北大学准教授